

『自然は僕らの宝物』

演者：盛口 満 先生、要約：高山壽彦



4月26日総会記念講演「自然は僕らの宝物」
演者：盛口 満 先生（愛称：ゲッチョ先生）

『自然は僕らの宝物』

そう語られた言葉には、生きものを観察する楽しさだけでなく、人の暮らしや歴史、文化も自然と深く結びついているという実感が込められていた。身近な生きものに目を向けることは、未知の世界や人との出会いへとつながってゆく。

ゲッチョ先生という愛称は、千葉県館山地方の方言で、カマキリもトカゲもともに“ゲッチョ”と呼ぶことに由来する。この呼び名からも、生きものが暮らしのすぐそばにあったことが感じられる。幼い頃には、「世界中の生きものを載せた図鑑を作りたい」、「アマゾンで新種を見つけたい」と夢見ていたという。

興味は、貝から虫、キノコ、森林へと広がっていった。

大学時代には、「研究するより、人に伝えるほうが向いている」と感じ、教員の道を選ぶ。埼玉・飯能の「自由の森学園」では、生徒たちは理科になかなか興味を示さなかったが、動物の骨格標本づくりを通して、生徒たちは少しずつ自然への関心を持つようになる。やがて自主グループ「ホネホネ団」が生まれ、標本作成士や博物館関係者として活躍する卒業生も現れた。

その後、沖縄・那覇のフリースクール「珊瑚舎スコレ」に関わる中で、子どもたちの自然観にも地域性があることに気づく。「沖縄

の生きもの」と聞けば「ヤンバルクイナ」や「イリオモテヤマネコ」が挙がるが、「街中で見られる生きものは？」と尋ねると、イヌ、ネコ、ハト、ゴキブリ、草という答えが返ってくる。身近な自然ほど、逆に意識されにくいのだ。また、「嫌い」という感情こそ自然への入口になるとも語られた。現在、大学で理科教育を教える中、多くの学生は虫が苦手で、特にゴキブリへの嫌悪感が強い。しかし、日本には65種類ものゴキブリが生息し、脱皮をすることや、脱皮殻を食べる種類がいることなど、ゴキブリは学生たちにとって「知らない」ことが多い存在だ。こうした教材研究から、“ゴキブリ図鑑”を出版するまでになった。

特に熱中しているのが、昆虫などに寄生して成長する菌類「冬虫夏草」である。登山実習中には、世界でも珍しい「ゴキブリタケ」の一種を発見した。冬虫夏草探しは、地面に這いつくばるようにして探す地道な作業だという。倒木の裏から「ザトウムシタケ」を見つけたり、ヨコバイやクモに寄生する新種候補を発見したりと、その観察眼は鋭い。

冬虫夏草の探索の途中では、葉を持たず菌類から栄養を得る菌従属栄養植物の「ヤンバルヤツシロラン」、「ヤクノヒナホシ」のような珍しい植物とも出会った。

「アマゾンに行かなくても新種は見つかる」とも語る。実際、那覇市内の公園では、カマキリの卵鞘に寄生する昆虫「カツオブシムシ」を利用する新種のハチが発見された。未知の世界は、遠い秘境ではなく、私たちの周りにも広がっているのである。

さらに印象的だったのは、「人との出会いが世界を広げる」という話である。自身はナメクジが苦手だったが、フリースクールで出会った“ナメクジ好き”の少女との交流から認識が変わる。彼女が夢中になって探していた「イボイボナメクジ」は、肉食性の珍しいナメクジである。普通のナメクジと異なり、海に住む「イソアワモチ」のグループである。琉球列島では島ごとに異なる種類が生息し、多くが未記載種だという。この出会いをきつ



講演の様子

盛口 満先生のおかげで、多くの会員が総会にきてくれました。

かけに、ナメクジの本まで執筆した。

最近、特に夢中になっている生きものが、「フナクイムシ」である。「フナクイムシ」の仲間は、流木や沈木に穴を掘り生活する特殊な二枚貝で、マングローブ林の木材にも穴を開ける。木の中から掘り出す作業は「冬虫夏草掘りのようだ」とも。掘削の仕組みは地下鉄トンネルのシールド工法のヒントにもなる一方、戦時中には、木造船を守るため国家規模で研究させた歴史もあり、生物研究が社会や技術とも深く結びついていることが分かる。

話題は、沖縄の夜間中学校へも及ぶ。戦争や戦後の混乱で十分な教育を受けられなかった高齢者たちが学ぶ場所で、理科を教えた経験が語られた。生徒たちは学校文化を知らないため、自由に発言し、自分の体験を交えながら学んでいたという。たとえば、捕虜収容所でコンビーフ缶を加工して針を作り、布団を縫ったという話は、「金属の性質」という理科の項目を、生きた経験として伝えられた。また、沖縄のお年寄りたちから聞いた「自然と食」の記憶も印象深い。「イリオモテヤマネコ」や「ジュゴン」など、現在では天然記念物として知られる生きものも、かつては食料や薬として利用した。有毒の「ソテツ」も、長い時間をかけて毒抜きや発酵を行い、飢えをしのぐ食料だったという。実際にソテツ料理作りにも挑戦したが、その難しさを痛感した。さらに、「アフリカマイマイ」の話も紹介された。現在では「危険」「気持ち悪い」とい

う印象が強いが、かつては“陸アワビ”として輸入され、戦中・戦後には食用にもされていた。著者自身も調理して食べてみたが、「硬くて味がしなかった」とのこと。そこから、グアム島で28年間潜伏生活を送った元日本兵・横井庄一さんの話へとつながる。横井氏は、毒抜きした「ソテツ」や「アフリカマイマイ」を食べながら生き延びていたという。

また、とある工事現場で100万年以上前の深海魚「ハダカイワシ」の耳石化石を見つけた。それが、「ハダカイワシ」の新種で、モリグチナガハダカ *Symbolophorus moriguchii* と命名され、“深海魚の玉手箱”という本も出した。その本が、研究者の目に留まり、新たな出会いに繋がり、掛川層群で、一緒に化石採集もできたという。

最後に紹介されたのが、「すいば」という言葉だった。京都の子どもたちが使っていた、“自分だけの秘密の宝探しの場所”を意味する言葉だ。著者にとって、生きもの探しや人との出会いは、その「すいば」を拡げてゆく営みだった。

『世界は宝箱でいっぱいだ』

身の周りの自然に目を向け、誰かの“好き”に耳を傾けることで、世界は驚くほど豊かに見えてくる。自然は、ただ眺めるものではなく、人と世界をつなぐ「宝物」なのだとして強く感じさせられる話だった。